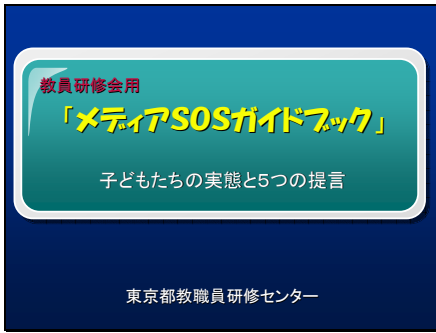
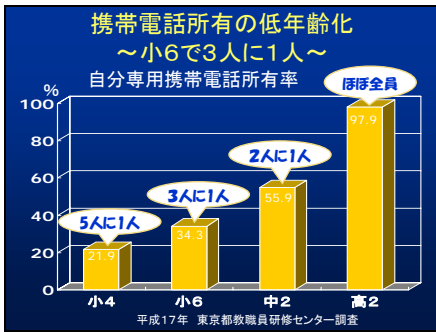


ス
ラ
イ
ド
1



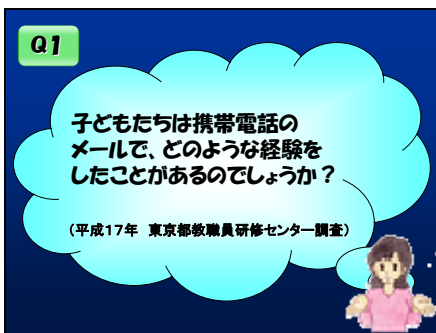
パソコンや携帯電話の急速な普及に伴い、子どもたちのコミュニケーションの手段は大きく変化しています。また、正しい情報を見極めたり、適切に情報を選択したりすることが難しい状況におかれているため、子どもたちがインターネット上のトラブルに巻き込まれる事件・事故が起きています。

ス
ラ
イ
ド
2



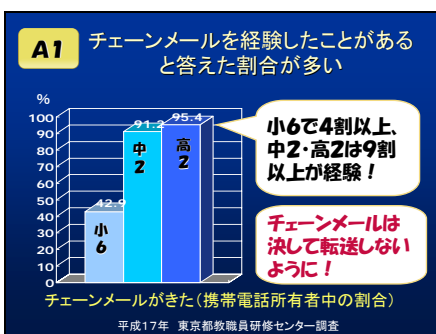
平成17年度に東京都教職員研修センターが行った調査によると、携帯電話の所有率は高校生が97.9%で、ほぼ全員が自分専用の携帯電話を持っています。中学生は55.9%で2人に1人が持っています。また小学生では、これまでの全国調査を大きく上回り、小学校4年生で5人に1人、小学校6年生では3人に1人が所有しています。

ス
ラ
イ
ド
3



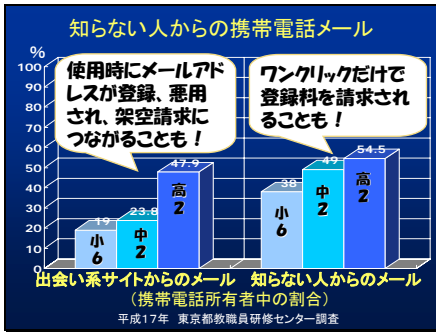
それでは、子どもたちは携帯電話のメールでどのような経験をしたことがあるのでしょうか。

ス
ラ
イ
ド
4



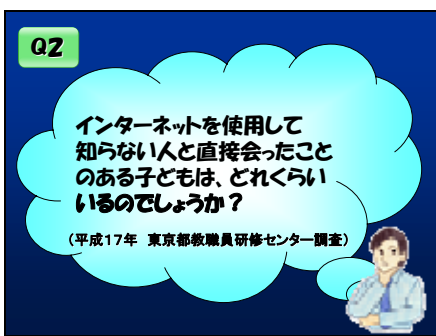
調査によると、携帯電話所有者の中で、小学校6年生で4割以上、中学校2年生、高校2年生はともに9割以上がチェーンメールを経験しています。「同じ文面で5人にメールを出さないと不幸になる。」等の脅し文句が書かれていたり、募金等の協力を呼びかけたりする場合があります。このような場合、無視するなど毅然とした態度を貫くことが肝要です。チェーンメールがきたら決して転送してはいけないことを教えましょう。

ス
ラ
イ
ド
5



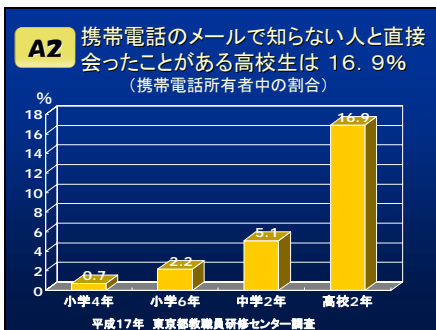
また、携帯電話を所有している小・中・高校生それぞれの4割～5割の子どもが「知らない人からのメール」を受けた経験があります。このようなメールを開き、ワンクリックただけで登録料などを請求されることもあります。ほぼ全員が携帯電話を持っている高校生では、半数近くの子どもが「出会い系サイトからのメール」を受けた経験があります。出会い系サイトへのアクセス時にメールアドレスや電話番号が登録され、架空請求につながることもあります。興味本位で返信しないように指導することが大切です。

ス
ラ
イ
ド
6



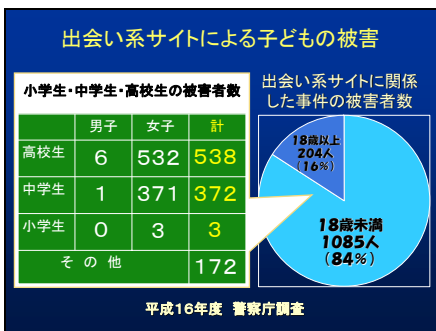
それでは、東京都の小・中・高校生でインターネットを使用して知らない人と直接会ったことのある子どもは、一体どれくらいいるのでしょうか。

ス
ラ
イ
ド
7



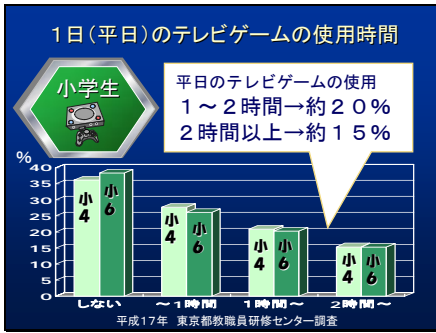
東京都教職員研修センターの調査によると、「携帯電話のメールを通して知らない人と直接会ったことがある」と答えた高校生は、携帯電話所有者のうち 16.9%でした。少数ですが小・中学生にもいました。

ス
ラ
イ
ド
8



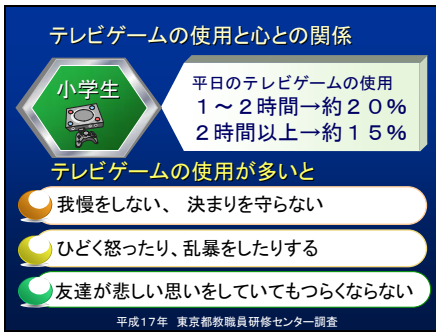
平成16年度にいわゆる出会い系サイトに関連した事件で被害にあった人は全国で1289人いました。そのうち18歳未満の被害者は84%です。そのうち小・中・高校生の被害者数は、この表の通りです。ほとんどが中・高校生ですが、小学生の被害者もいます。また、情報メディアにかかわる犯罪の容疑者の出会い系サイトへのアクセスの手段は、96%が携帯電話でした。インターネットで知らない人と出会うことにより、犯罪に巻き込まれる危険性があることを、子どもたちに理解させる必要があります。

ス
ラ
イ
ド
9



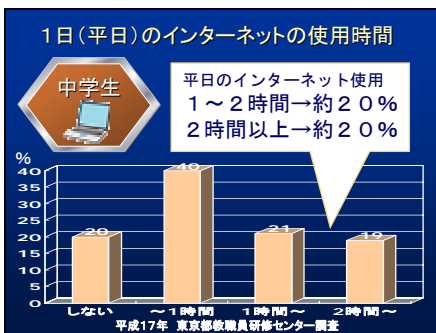
携帯電話、パソコン、テレビゲームなどのメディアに長時間接していると、子どもの心に様々な影響が出てきます。テレビゲームの使用と心との関係を見ると、影響が一番顕著なのは小学生でした。東京都教職員研修センターの調査によると、テレビゲーム使用が1時間～2時間の小学生は約20%、2時間以上の小学生は15%います。

ス
ラ
イ
ド
10



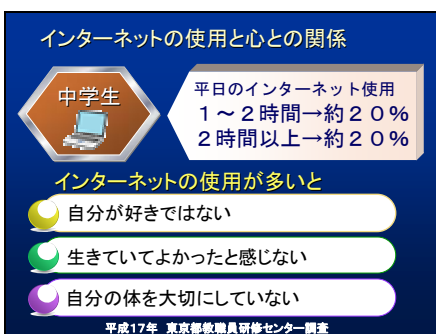
このようにテレビゲームの使用が多いと、「我慢をしない」「決まりを守らない」「ひどく怒ったり、乱暴してしまったりする」「友達が悲しい思いをしてもつらくならない」等と答える傾向が強く見られました。テレビゲームを長時間使用することにより、対人関係や社会性を身に付ける上で様々な影響があることを、再確認する必要があります。

ス
ラ
イ
ド
11



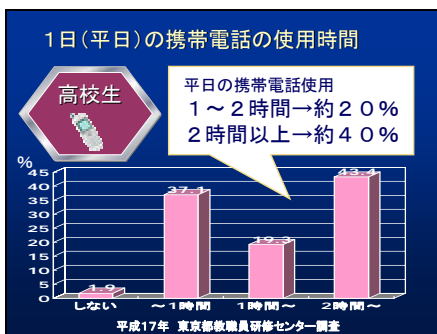
インターネット使用と心との関係を見ると、影響が一番顕著なのは中学生でした。東京都教職員研修センターの調査によると、インターネット使用が1時間～2時間の中学生は約20%、2時間以上の中学生も約20%いました。

ス
ラ
イ
ド
12



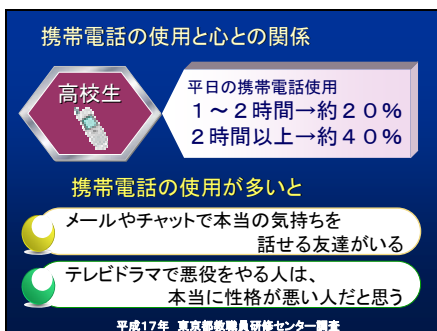
このようにインターネット使用が多いと、「自分が好きではない」「生きていてよかったと感じない」「自分の体を大切にしていない」等と答える傾向が強く見られました。インターネットを長時間使用していると、自分を大切にしないなど自尊感情への影響が心配されます。

ス
ラ
イ
ド
13



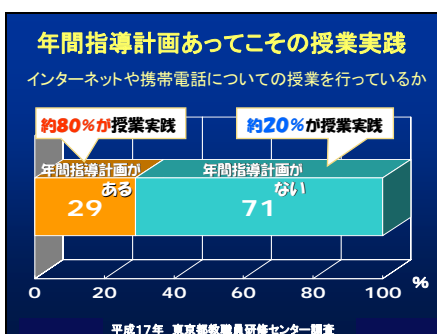
携帯電話の使用と心との関係を見ると、影響が一番顕著なのは高校生でした。東京都教職員研修センターの調査によると、携帯電話の使用が1時間~2時間の高校生は約20%、2時間以上の高校生は約40%いました。

ス
ラ
イ
ド
14



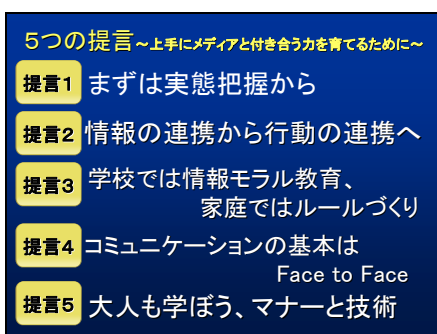
携帯電話の使用が多いと「メールやチャットで本当の気持ちを話せる友達がいる」「テレビドラマで悪役をやる人は、本当に性格が悪い人だと思う」等と答える傾向が強く見られました。こうしたことから、使用時間が長くなると、携帯電話というメディア機器を介した友達の姿がその友達の本当の姿であると思ってしまう傾向が浮かび上がってきます。まずは、対面でのコミュニケーションの充実を図ることが、確かな友人関係を築くことにつながることを教えていくことが重要です。

ス
ラ
イ
ド
15



調査によると、「インターネットや携帯電話の適切な使い方についての指導が年間指導計画にある」と答えた教員は、適切な使い方についての授業を行っているという割合が高いという結果が出ました。しかし、年間指導計画に位置付けられているのは、全体の約3割でした。指導は必要だと思っても年間指導計画に位置付けられておらず、どのように指導してよいか分からないという実態がうかがえます。東京都の子どもたちの実態から判断すると、小学校の段階から「インターネットや携帯電話の適切な使い方についての年間指導計画」の作成が必要と考えます。

ス
ラ
イ
ド
16



子どもたちにとってメディアは、とても興味・関心が高いものですが、使用時間や使い方によっては心身に様々な影響が出てくるのが心配されます。そこで、上手にメディアと付き合う力を育てるための5つの提言について説明します。

ス
ラ
イ
ド
17

提言1 まずは実態把握から

- 携帯電話所有率は？
- メディアに長時間接している子どもは？
- メールや掲示板でどのような経験をしているのか？

↓

実態把握資料の活用を！
都の実態との比較もすぐにできます

提言1は、「まずは実態把握から」です。自分の学校(学年、学級)では、メディアに長時間接している子どもはどのくらいいるのでしょうか。子どもたちの携帯電話所有率はどのくらいでしょうか。より適切な指導を行うためには、東京都の実態と比較することができる実態把握資料を活用し、自分の学校(学年、学級)の実態把握に努めることが大切です。

ス
ラ
イ
ド
18

提言2 情報の連携から行動の連携へ

- 保護者との情報の共有を！
- 課題のある児童・生徒に対して
連携のとれた対応を！

提言2は「情報の連携から行動の連携へ」です。メディアが与える児童・生徒の心身への影響について、多くの教員が心配しています。また、保護者も同様の心配を抱えています。今後、情報を保護者と共有するとともに、課題のある児童・生徒に対して、連携のとれた対応を図っていくことが大切です。場合によっては諸機関との連携も必要となります。そして、保護者会や学校公開等の機会を捉えて行動の連携を働きかけ、ともに児童・生徒の情報モラルを身に付けさせる取り組みを行っていくことが大切です。

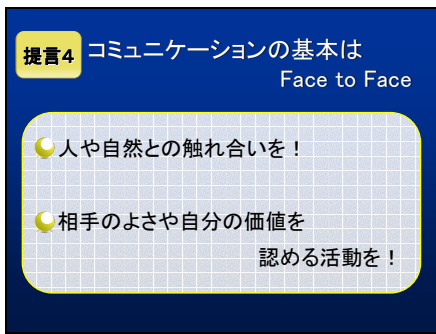
ス
ラ
イ
ド
19

提言3 学校では情報モラル教育、
家庭ではルールづくり

- 学校では情報モラル教育の
年間指導計画を基に実践！
- 家庭で話し合い、
メディア利用のルールづくりを！

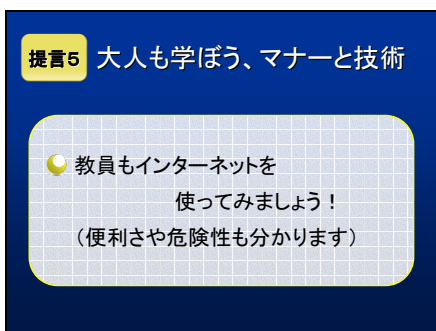
提言3は「学校では情報モラル教育、家庭ではルールづくり」です。自分の学校(学年、学級)の児童・生徒の実態に合わせ、インターネットや携帯電話の使い方を含めた情報モラル教育の年間指導計画を作成し、それを基に意図的・計画的に情報モラル教育を実践することが重要です。家庭では、児童・生徒と保護者が共に話し合い、メディア利用のルールを作ることが重要です。ルールの内容は、1日の使用時間の制限を作ること、子どもだけになる場所での使用を避けること、正しい使い方を考えさせることが基本となります。時間の制限については、個々の使用時間だけでなく、メディアに触れる総時間数も考慮する必要があります。

ス
ラ
イ
ド
20



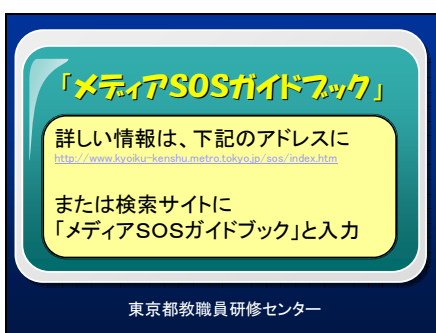
提言4は「コミュニケーションの基本は Face to Face」です。テレビゲームは、人や自然との直接触れ合う体験を奪い、インターネットは、思春期の多感な時期に、直接のコミュニケーションを減少させ、自尊感情へのマイナスの影響を与えています。携帯電話は、メールの情報で培った友人関係に強い信頼をもたせる反面、現実の人間関係を築くのを難しくするという影響を与えています。直接のコミュニケーションの中で人間関係を培い、相手のよさや自分の存在の価値を認める活動を経験させることが重要です。

ス
ラ
イ
ド
21



提言5は「大人も学ぼう、マナーと技術」です。急速に普及したインターネットや携帯電話については、大人自身の経験が少ないこともあり、子どもの使用実態を適切に把握しきれていないという実態があります。そのため、トラブルや事件に巻き込まれるまで、学校や保護者が気付かなかったというケースもあります。そこで、まず教員も実際にインターネットを使ってみましょう。便利ですが危険性もあることが分かります。その上で子どもたちへの指導を行うことが重要です。東京都教職員研修センターの調査でも、ニューメディアへの接触時間が多い教員ほどニューメディアの使い方についての授業実践が多いことが分かりました。苦手意識をもたず、情報モラル教育は必要なことと考え、触れていくことが重要です。

ス
ラ
イ
ド
22



今回説明した内容の詳細については、「メディアSOSガイドブック」としてインターネット上に公開されています。子どもたちのメディア利用に関する実態や授業ですぐ使える資料などがたくさんあります。また、参考となるホームページ(Webページ)の紹介もありますので、ぜひ一度ご覧ください。